16 世紀ヴェネツィア寡頭支配層の多面的ネットワーク

―コンパニーア・デッラ・カルツァの会員分析を通して―

和　栗　珠　里

はじめに

いかなる社会においても，人と人の間には複雑な結びつきがある。ヴェネツィア共和国の支配階級である貴族たちも例外ではなかった。なかでも最上層の貴族たちは，さまざまな人間関係のネットワークを張り巡らし，それを最大限に利用しながら寡頭支配体制をつくりあげていた。彼らにとって最も重要だったのは，血縁・姻戚関係である。成人男性貴族全員が参加する大評議会（Maggior Consiglio）での投票が国政の基本であったヴェネツィア共和国において姻戚も含めた広い意味での親族集団が果たした役割の大きさや，貴族たちが駆使した結婚戦略については，すでに多くの研究がなされてきている[1)]。

しかし，ヴェネツィアの貴族たちがつながり合う「場」は，ほかにも数多く存在した。官職や聖職，あるいはビジネスを通じた関係，さらに，兄弟会やアカデミアといった何らかの社団を通じた関係など，多様なネット

キーワード：ヴェネツィア，ネットワーク，寡頭支配，人的結合，コンパニーア・デッラ・カルツァ

ワークが重なり合い，個々の貴族はそれらに複合的にかかわっていたのである。それらの人間関係は，閉じられた輪の中に収まるものでも，一元的に把握できるような単純なものでもない。また，個々の貴族について得られる情報に限りがあるため，それらの人間関係を網羅的・包括的に描き出すことは不可能に近い。このような困難さゆえに，親族関係以外のヴェネツィア貴族の人的ネットワークは付随的・断片的に語られるにとどまり続けている。

筆者はかつて，ある聖堂のパトロン（仏教風に言えば「檀家」）たちに着目し，彼らの間の関係の分析を試みた。そこから浮かび上がったのは，血縁・婚姻関係，官職・聖職や特定の芸術家への文化的パトロネジを通じた結びつきなど，まさに重層的な人的結合のネットワークである[2)]。なかでも興味深いのは，この聖堂のパトロンたちの多くが，ルネサンス期のヴェネツィア寡頭支配層に特有の社会的結合の「場」であったコンパニーア・デッラ・カルツァという祝祭集団にかかわっていたということであった。もっとも，このときの研究は聖堂のパトロン集団の人間関係をテーマとしていたため，コンパニーア・デッラ・カルツァの会員間の結びつきについて深く掘り下げることはできなかった。筆者はまた，コンパニーア・デッラ・カルツァそのものの会員分析も試みたことがあるが，家系ごとの分析にとどまり，個々の会員についての詳細な分析はおこなわなかった[3)]。

そこで本稿では，筆者の課題として長年残っていたこの問題をとりあげ，コンパニーア・デッラ・カルツァ会員のプロソポグラフィ分析をおこなう。ヴェネツィア貴族の複雑な人間関係を理解するには，このような手がかりをもとに絡み合った糸を根気強く解きほぐしていくしかない。コンパニーア・デッラ・カルツァに手がかりを求める根拠としては，それがルネサンス期，とくに16世紀前半という限られた時期に特化した社会文化的現象であったこと，また，1組あたりの会員数が平均して20～30人，多くと

も 50 人未満であり，プロソポグラフィ分析のためのサンプルとして適度な規模であることなどが挙げられる。ここでは，具体的な分析対象として《菜園家(オルトラーニ)》組（Compagnia degli Ortolani）をとりあげる。

1. コンパニーア・デッラ・カルツァ

分析に入る前に，コンパニーア・デッラ・カルツァの全般的な概要をおさえておきたい。

コンパニーア・デッラ・カルツァ（Compagnia della Calza）とは，「長靴下の仲間たち」を意味する。この呼称は，各々の組(コンパニーア)が特定のデザインのカルツァ（タイツ）をユニフォームとしていたことに由来する。タイツは中近世のヨーロッパにおいて男性の脚線美を強調するファッションアイテムだったが，伝統的な長衣(トーガ)を成人男性の正装としたヴェネツィア共和国では，カルツァは若者だけが身につけるものだった [4)]。カルツァだけでなく衣服にも，組のイニシャルやエンブレムをあしらった豪華な刺繍がしばしば施された。このような“いなせな”若者の姿は，V. カルパッチョの絵画にもしばしば登場する [5)]。

コンパニーア・デッラ・カルツァは，「祝祭と楽しみ」によって「我々の永遠の祖国に賞賛と栄光」を与えることを目的として結成された [6)]。諸史料によって存在が明確に確認されるのは 15 世紀中期から 16 世紀中期までの約 1 世紀間のみであり，この間に計 30 ～ 40 組があったと推定される [7)]。もっとも，多くの組は結成から 10 年以内に解散または消滅しており，短いものでは結成年の記録しか残っていない [8)]。一部の例外を除き，会員はほぼすべてが貴族だった [9)]。発足時の会員の平均年齢はおおよそ 16 ～ 20 歳であり，成人して政治の世界に入る前の若者の集まりであったことが短命さの理由であったと考えられる [10)]。そのため，会員の入れ替わりは少なく，会員間には緊密な結びつきがあったことが想定される。活動の機会は，結

成時，謝肉祭，キリスト昇天祭，外国の君侯のヴェネツィア訪問時，会員の婚礼などで，大掛かりで壮麗な野外劇，仮面舞踏会，馬上試合などが催された。また，豪華に飾られた山車船（soleri）に会員と貴婦人たちが乗り込み，楽団の演奏に合わせてダンスを踊りながら水上パレードをすることもあった[11)]。このような催しは一度に数百ドゥカートもの多額の費用を要したが，それは原則として会員たちの出資によってまかなわれた[12)]。また，入会金も一人数十ドゥカートという高額なものであった[13)]。つまり，コンパニーア・デッラ・カルツァへの参加は，ヴェネツィア貴族の中でもきわめて裕福な家々の息子たちだけに許される特権だったと言えよう。

コンパニーア・デッラ・カルツァに関する研究で最も古いものは，リオネッロ・ヴェントゥーリが1908年と1909年の『ヌオヴォ・アルキーヴィオ・ヴェネト』誌に分載した，計400ページを超える長い論文である。ありとあらゆる史料を渉猟して詳細な情報を集めてあり，さまざまな組の活動，会則，会員名簿などが挙げられている[14)]。しかし，その後，1980年頃までは，ヴェネツィア史研究においてコンパニーア・デッラ・カルツァがとりあげられることは皆無に等しかった。コンパニーア・デッラ・カルツァが注目されるようになったのは，祝祭史というジャンルの発展による。また，演劇や舞踊が活動の中心的な要素であったため，これらの方面からのアプローチも増えている[15)]。このような無形文化の発展にコンパニーア・デッラ・カルツァが貴重な貢献をしたことは言うまでもないが，とくに祝祭史研究においては，若者の祝祭集団が担った政治的・社会的機能がしばしば論じられる。近年のコンパニーア・デッラ・カルツァ研究の第一人者であるカジーニは，2011年の論文において，フランスやフィレンツェの「若者組」の例と比較しつつ，ルネサンス期ヴェネツィアにおける寡頭支配の強化とコンパニーア・デッラ・カルツァの活動が密接な関係を持っていたことを強調している。すなわち，これらの集団は，華麗な祝祭や外国の君侯の接

待を通してヴェネツィアの栄光を高め，寡頭支配層の威信を可視化するとともに，共和国の将来を担う次世代のエリートが育つ場にもなっていたのである[16)]。また，コンパニーア・デッラ・カルツァを通した人間関係の重要性もしばしば言及されるのだが，従来の研究では，特定のコンパニーアの会員間のつながりについても，個々の会員がどのような人物であったかについても，具体的な検証はほとんどおこなわれていない[17)]。

2.《菜園家（オルトラーニ）》組

(1) 時代背景

《菜園家（オルトラーニ）》組は1515年に結成され，少なくとも1525年まで続いたコンパニーア・デッラ・カルツァである[18)]。約10年に及ぶその活動期間は，ヴェネツィアにおいて寡頭政が最も強まった時期と重なっている。

ヴェネツィアでは，1300年前後におこなわれた一連の法的手続きにより，大評議会議員資格が特定の家門の世襲特権とされ，大評議会議員のみが参政権を持つ共和政体ができあがった。そして，この特権を持つ家系が支配階級としての貴族と定義づけられたのである[19)]。しかし，正式に議員となるためには，貴族家系の正嫡であることを証明して資格審査を通過しなければならず，その審査は時代を追うごとに厳密化されていった。1506年には出生時に父母および保証人の名とともに貴族の子を登録する『黄金の書』（Libro d'Oro）が制定され，さらに1526年には，貴族の結婚そのものを政府に届け出ることが義務付けられた[20)]。こうして，父親だけでなく母親の血統までもが重視される傾向が強まる。高い“格付け”を持って生まれた貴族たちは，成長して政界入りした後も父方・母方双方の有力な親族から支援を受け，エリート街道を進むことができたのである。

いっぽう，政治的・経済的な面で，16世紀初期のヴェネツィアは多くの困難に見舞われていた。15世紀後半から繰り返されるようになったオスマ

ン・トルコとの軍事衝突は，ほぼ常にトルコの優勢のうちに終わり，ヴェネツィアは東地中海の領土と商業拠点を次々に失っていった。また，アジアとヨーロッパを直接結ぶ新航路が開発され，東方貿易におけるヴェネツィアの独占的地位は崩壊した。さらに，イタリア戦争のなりゆきで突如，全周辺諸国を敵に回して孤立したヴェネツィアは，カンブレー同盟戦争を戦う羽目に陥り，1509 年のアニャデッロの会戦で敗北すると，地滑り的にイタリア本土領のほぼすべてを失った。重大な財政危機に直面した政府は，官職売買の導入に踏み切る。1510 年に書記官職から始まった官職売買は，1516 年にはドージェ（ヴェネツィア共和国元首）に次ぐ地位であるサン・マルコ財務官にまで及び，2 か月足らずの間に 7 人の新しい財務官が選出され，計 75,000 ドゥカートが政府に融資された。1517 年に失地の回復が完了すると，官職売買は一旦廃止されたが，トルコとの対立が再燃した 1522 年に復活され，この 1 年だけで 15 人もの財務官が生まれた。官職売買は，財力のある貴族による権力へのアクセスをより容易にし，寡頭支配を促進した[21)]。

《菜園家（オルトラーニ）》組の活動期間は，ヴェネツィアが“アニャデッロ・ショック”から回復を遂げつつあった時期にもあたる。失地再征服戦争の展開と戦後の軍事システム再構築，財政再建，そして何より，失われた威信を取り戻し，ヴェネツィア共和国が依然として偉大であることを国の内外に示すことが必要だった。いわゆる“ヴェネツィア神話”―ヴェネツィアの政治的安定性，卓越性，不死性，等々を称揚する一種のブランドイメージ―は，このような文脈のもとで熟成されたと考えられている[22)]。コンパニーア・デッラ・カルツァによる華やかな祝祭は，まさに“ヴェネツィア神話”の具現化であったとも言えるのである。

(2) 会員のプロソポグラフィ

a. 史料と手法

《菜園家(オルトラーニ)》組の会員名は，ヴェントゥーリ論文の補遺に挙げられた 12 組のコンパニーア・デッラ・カルツァの会員リストから知ることができる[23]。ヴェントゥーリは典拠を明らかにしていないが，最も基本的な情報源は，ヴェネツィア貴族マリン・サヌード（1466-1536）の『日記』であろう[24]。1496 年から 1533 年まで, 身近な出来事から大評議会での議決内容に至るまで，日々起こることを詳細に書き綴ったサヌードの『日記』は，この時代のヴェネツィアを知るための第一級の史料である。彼は，コンパニーア・デッラ・カルツァが催す祝祭についても多くの記録を残しており，われわれはそこから参加者の名前を知ることができる。《菜園家(オルトラーニ)》組についても，1524 年 2 月 4 日付の記述の中で会員として 21 人の若者の名が列記されている[25]。しかし，サヌードの『日記』のほかの箇所やほかの史料から,《菜園家(オルトラーニ)》組の会員がそれ以外にもいたことがわかる。ヴェントゥーリは，それらの情報を総合してリストを作成したと考えられる。

とはいえ，サヌードの『日記』やヴェントゥーリのリストから知ることができるのは, 会員本人の氏名と父親の名のみである。ヴェネツィアでは，同時代に生きた人々の中に同姓同名の複数の人物がいるのは珍しいことではなかった。そのため，父親の名，さらに，本人の氏名も父親の名も同じ場合には祖父の名や居住教区名を示すことで区別されていたのである。会員の中には父親の名が挙がっていない者もいる。同時代に同姓同名の別人がおらず，本人の氏名だけで個人が特定できる場合もあるが，単に父親の名が不明な場合もある。また，ごく一部ではあるが，特別な肩書を持つ場合は，その肩書が併記される場合もある。いずれにせよ，16 世紀初頭に約 2,700 人いたとされるヴェネツィアの成人男性貴族の中から[26]，それぞれの会員を特定することが分析の第一のステップとなる。

本人の氏名と父親の名を手がかりにヴェネツィア貴族の個人を特定するための基本史料は，16 世紀のヴェネツィア貴族マルコ・バルバロ（1511-1570）が作成した膨大な家系図群である[27]。この家系図群では，彼と同時代に生きたヴェネツィア貴族の系譜が詳細に示されており，配偶者や経歴等に関する書き込みがある人物も少なくない。また，その家系から輩出した重要人物（ドージェ，ドージェ選挙人，サン・マルコ財務官など）が別記で説明されている。このバルバロの家系図群をもとに，ヴェントゥーリが挙げる 47 人の《菜園家（オルトラーニ）》組会員を一人ひとり特定していった結果，3 人が重複していることが判明した（同姓同名の別人ではないことを確認）。それらを除く 44 名について，筆者が知り得た個人情報の概略を備考として補足しつつ作成したのが表 1 である[28]。

b. 会員たち

表 1 からまず看取されるのは，会員の多くがヴェネツィア共和国の要人を近親者に持つこと，また，すべてというわけではないが，会員同士の間に密接な血縁・婚姻関係があることである。《菜園家（オルトラーニ）》組の活動期間は 3 人のドージェの治世にまたがっている。すなわち，レオナルド・ロレダン（在位 1501-1521），アントニオ・グリマーニ（在位 1521-1523），アンドレア・グリッティ（在位 1523-1538）である。《菜園家（オルトラーニ）》組には，これら 3 人のドージェの近親者が見いだされる。

まず，会員⑦のベルナルド・カッペッロは 1518 年にレオナルド・ロレダンの孫と結婚した。サヌードの『日記』では，両人が結婚した事実のみが単に記されているだけで[29]，婚礼の様子は述べられていない。会員の婚礼はコンパニーア・デッラ・カルツァの最も重要な活動のひとつであったうえ，花嫁の祖父がドージェ在位中であったため，盛大におこなわれたに違いないのであるが，サヌードが詳しく記録していない理由は不明である。

しかし，結婚後，妻はしばしば《菜園家（オルトラーニ）》組の催しに出席し花を添える存在であったことが，のちの記述からうかがえる[30)]。

会員㉑のマルコ・グリマーニはアントニオ・グリマーニの孫であり，伯父ドメニコは枢機卿として（在位 1503-1523），アニャデッロの会戦後のヴェネツィアと教皇庁の関係回復に尽力した人物だった[31)]。グリマーニ一族は 16 世紀のヴェネツィアで最も権勢を誇った家であり，マルコ自身，1522 年に官職売買により 28 歳という異例の若さでサン・マルコ財務官の職に就いた[32)]。翌年には，弟のヴェットールも官職売買でサン・マルコ財務官となった[33)]。また，兄マリーノは聖職に進み，1517 年には伯父ドメニコからアクイレイア総大司教の地位を譲り受け，1528 年には枢機卿となった[34)]。アクイレイア総大司教の地位は 16 世紀の大半を通じてグリマーニ家の独占物であり続け，マルコ自身も 1529 年から 1533 年までの間，その禄を受けた[35)]。⑳のアントニオ・グリマーニも同名のドージェの孫であり，マルコとは従兄弟である。マルコがサン・マルコ財務官に就任したときにも，翌年アントニオが結婚したときも，《菜園家（オルトラーニ）》組の仲間たちによる祝宴がドゥカーレ館（政庁舎）でおこなわれた[36)]。グリマーニ家からはもう一人，㉒のピエトロが《菜園家（オルトラーニ）》組に参加している。ピエトロは父がドージェの従弟であったが，⑳や㉑とは祖父の代に枝分かれした別系統になる。しかし彼も，彼の 2 人の兄も，官職売買によってサン･マルコ財務官になった[37)]。

アンドレア・グリッティについては，彼がドージェ在位中であった 1525 年に孫娘ヴィエンナが《菜園家（オルトラーニ）》組会員⑫のパオロ・コンタリーニと結婚し，婚礼の10日前からさまざまな催しが延々とおこなわれた[38)]。コンタリーニ家はヴェネツィア貴族の中で最も多く枝分かれした巨大クランで，ひと口にコンタリーニと言ってもさまざまな系統があり，貴族でありながら貧困にあえぐ者も多かったが，彼が属したのは最も裕福で「宝箱の（スクリンニ）」という

屋号で呼ばれる系統であった。父ザッカリアはフランス王シャルル８世のもとへ大使として送られ，王から騎士叙任を受けた。また，兄フランチェスコも神聖ローマ皇帝カール５世のもとへの大使などの要職を歴任し，1559年には正式な選挙によってサン・マルコ財務官となる[39)]。パオロ自身も，熟年期には本土領ベルガモの軍事長官やヴェローナの都市長官，十人会の長などの地位に就いた[40)]。⑬のピエトロは，彼の双子の弟である。通常，兄弟が同じ組に入る例は稀であり，その理由は年齢の違いが交友関係の違いを生むためであると考えられるが，彼らの場合は双子だったことから，共に《菜園家（オルトラーニ）》組に入ったのであろう[41)]。

ヴィエンナ・グリッティとパオロ・コンタリーニの縁組に関して，興味深い事実がある。弟ピエトロはアニャデッロの会戦の時期，クレモナに都市長官として赴任していた父のもとにおり，父と共にフランス軍の捕虜となった。フランスでの捕囚生活は1513年まで続いたが，1512年からはブレシャ奪回戦の折に捕虜となったアンドレア・グリッティと共にあった。グリッティは捕虜の身でありながら巧みな交渉によってフランスとヴェネツィアの関係回復に成功し，1513年にピエトロ・コンタリーニと共に釈放された。その後，グリッティは軍総監督官（Provveditore Generale in Campo）[42)]として失地回復戦争の中心的な役割を果たし，1516年には最終的なブレシャ奪回を成し遂げた。それらの行動において，ピエトロは常にグリッティの傍らにいたという[43)]。しかし，その後ピエトロは宗教に傾倒して，インクラービリ施療院の設立にもかかわり[44)]，晩年にはバッフォ司教になった。グッリーノによれば，グリッティはピエトロを気に入って目をかけていたらしいが，このようないきさつから，双子の兄であるパオロのほうに婿としての白羽の矢を立てたのかもしれない。

《菜園家（オルトラーニ）》組では，会員44人中７人が外国人である。他の組でも，全体の１割前後を外国人が占めるケースは複数あるが[45)]，《菜園家（オルトラーニ）》組の場合は

15 パーセントとやや多い。7 人の外国人のうち，残念ながら 5 人については，詳しい素性は不明である。㉟のピエルアントニオ・ダ・サンセヴェリーノはナポリ貴族でカラブリア地方ビジニャーノの領主だったが，《菜園家(オルトラーニ)》組に加わった 1521 年には，政敵にビジニャーノを奪われていた。その 2 年前に皇帝カール 5 世から直々に金羊毛騎士団への入会を認められていたサンセヴェリーノはヴェネツィア政府の歓迎も受け，政府主催の宴が彼のために開かれた[46]。しかし，彼がその後どれほどヴェネツィアにとどまっていたかも，彼とヴェネツィアの関係も，定かではない。いっぽう，㉖のアントニオ・ダ・マルティネンゴはヴェネツィアと深い関係を持つ人物だった。ブレシャ貴族マルティネンゴ家の人々は傭兵隊長として活躍し，とくにヴェネツィアのために戦った。彼と同名の祖父はその軍功により 1448 年にヴェネツィア貴族の地位を与えられ，彼と彼の兄弟レオナルドの子孫にもその特権が与えられた[47]。よって，㉖のアントニオはヴェネツィア貴族でもあったが，通常，外国人に与えられた貴族の地位は名誉的な称号にすぎなかった[48]。もっとも，マルティネンゴ家の場合には，他の多くの外国人貴族と異なり，バルバロの家系図群に記載があることや，アントニオの息子ジロラモが政府官職に就いていることなどから[49]，まったくの形式的な外国人貴族ではなく，あるていどヴェネツィアの貴族社会に同化していたかもしれない。アントニオ・ダ・マルティネンゴも⑬のピエトロ・コンタリーニと同様，フランスの捕虜としての境遇をアンドレア・グリッティと共有していた。しかも，グリッティに協力して共に敵の手に堕ち，釈放後もグリッティと共にブレシャとヴェローナの奪回のために戦ったのである[50]。

c. アンドレア・グリッティをめぐる人間関係

前節からは，⑫・⑬や㉖など，1523 年にドージェとなったアンドレア・

グリッティと深い縁のあった人物たちの存在が浮かび上がってきた。そこで，グリッティとの関係に留意しながら《菜園家（オルトラーニ）》組の会員たちの個人情報をさらに調べると，少なくとも血縁・婚姻関係においてグリッティと何らかのつながりを持つ会員がほかにも多数いることがわかった。

なかでも，グリマーニ家のメンバーは複雑にグリッティと結びついている。㉑のマルコ・グリマーニは，《菜園家（オルトラーニ）》組の活動期よりはずっと後のことであるが，グリッティの従弟でその右腕とも目されていたマルコ・フォスカリの息子に自分の娘エレナを嫁がせた。また，自身の妻ビアンカ・フォスカリの父フランチェスコはマルコ・フォスカリの従兄で騎士にしてサン・マルコ財務官であり[51)]，㉒のピエトロ・グリマーニの初婚の妻はマルコ・フォスカリの娘だった[52)]。さらに，⑳のアントニオ・グリマーニの妻は，グリッティのビジネスおよび政治上のパートナーであった銀行家アルヴィーゼ・ピザーニの娘であり，妻の兄弟ジョヴァンニはグリッティのもう一人の孫娘ベネデッタと1520年に結婚している[53)]。つまり，⑫のパオロ・コンタリーニとアントニオ・グリマーニは，互いの妻を介して間接的な義兄弟の関係にあったことになる。さらに，パオロ・コンタリーニの弟ピエトロが設立にかかわったインクラービリ施療院の主要な保護者の中には，ピエトロ・グリマーニの父ヴィンチェンツォがいた[54)]。

グリマーニ家のほかにも，グリッティの従兄弟の娘と結婚した㉜のジョヴァンニ・ピザーニ（先述のアルヴィーゼとは別系統）[55)]，グリッティと父同士が従兄弟である㉓のフランチェスコ・グリッティとその義兄弟である⑰のベルナルド・ジュスティニアンなど[56)]，必ずしも近いとは言えないながらも，グリッティにつながりのある会員が見いだされる。また，グリッティには，コンスタンティノープルでビジネスを営んでいた時期に現地女性との間に生まれた庶子アルヴィーゼがいたが，㊸のカルロ・ゼンの父ピエトロは1523年にバイロ（領事）としてコンスタンティノープルに赴任し，

アルヴィーゼと親交を結んだ[57)]。

アンドレア・グリッティの人脈については，フィンレイの1978年の論文や2004年の拙稿をはじめ，さまざまな研究がなされてきたが[58)]，本稿の分析結果は，コンパニーア・デッラ・カルツァという視点から，そこに新たな情報を補足するものである。

むすび

従来のコンパニーア・デッラ・カルツァ研究では，会員たちが「最も裕福で最も有力な家の出身である[59)]」ことが常に言われながらも，彼らの家がどれほど裕福で有力であったか，また彼ら自身がどのような人物であったか，具体的な調査はまったくおこなわれてこなかった。本稿は，《菜園家(オルトラーニ)》組の会員たちがヴェネツィアで最上層の貴族家系に属していたことを実証的に示すとともに，血縁・婚姻関係にとどまらない会員間の複合的・多面的なネットワークの一部を解明した。そこからはまた，カンブレー同盟戦争の失地回復運動においてアンドレア・グリッティと強い絆で結ばれた人々や，直接の目的は利己的な権力欲だったかもしれないとはいえ，官職売買を通じて失地回復のための資金を提供した人々など，祝祭を通じてヴェネツィアの威信を高めるだけでなく，より現実的にヴェネツィアの復活に寄与した人々の群像も浮かび上がった。“アニャデッロ後”という時代背景に照らし合わせれば，エリート層に属していた《菜園家(オルトラーニ)》組の若者たちの間では，独特の矜持が共有されていたとも想像できよう。

本稿では《菜園家(オルトラーニ)》組のみを扱ったが，調査していく中で，《菜園家(オルトラーニ)》組の会員たちの親族にも，ほかの組に属した人物が数多くいることがわかった[60)]。今後は，ほかのコンパニーア・デッラ・カルツァやほかの社団にも分析の対象を広げ，ヴェネツィア貴族の人的結合関係をさらに明らかにしていきたい。

注

1）Stanley Chojnacki (1973), 'In Search of the Venetian Patriciate: Families and Factions in the Fourteenth Century,' in J. R. Hale (ed.), *Renaissance Venice*, London, pp. 47-90; Id. (1975), 'Dowries and Kinsmen in Early Renaissance Venice,' *Journal of Interdisciplinary History,* 5(4), pp. 571-600; Robert Finlay (1978), 'Politics and the Family in Renaissance Venice: the Election of Doge Andrea Gritti,' *Studi veneziani*, n.s. 2, pp. 97-117; Bianca Betto (1981), 'Linee di politica matrimoniale nella nobiltà veneziana fino al XV secolo. Alcune note genealogiche e l'esempio della famiglia Mocenigo,' *Archivio stotico italiano*, 139, pp. 3-64; Giuseppe Gullino (2007), 'Il "clan" dei Foscari. Politica matrimoniale e interessi famigliari (secc. XIV-XV),' *Studi veneziani*, n.s. 54, pp. 31-64 など。

2）和栗珠里（2004）「『ポスト・カンブレー期』ヴェネツィアの寡頭支配層とパトロネジ」『西洋史学』214, pp. 1-21.

3）和栗（1998）「コンパニーア・デッラ・カルツァとルネサンス期のヴェネツィア貴族階級」『イタリア学会誌』48, pp. 162-180.

4）ヴェネツィアの服飾史については，Stella Mary Newton (1988), *The dress of the Venetians, 1495-1525*, Aldershot を参照。

5）たとえば，聖ウルスラ伝連作の「大使たちの帰還」や「婚約者たちの出会いと巡礼団の出発」，「リアルトでの聖十字架の奇跡」など。Cf. Ludovico Zorzi, *Carpaccio e la rappresentazione di Sant'Orsola*, Torino, 1988, *passim*.

6）1541年に結成された《永遠（センピテルニ）》組の会則の前文より。Lionello Venturi (1909), 'Le Compagnie della Calza (Sec. XV-XVI),' (cont. e fine), *Nuovo Archivio Veneto,* n.s. XIX, p. 200.

7）名称や会員名が判明しているものは23組であるが，日記作者マリン・サヌードによれば，1533年までに34組，16世紀後半の著述家フランチェスコ・サンソヴィーノによれば43組存在したという。Venturi (1908), 'Le Compagnie della Calza (Sec. XV-XVI),' *Nuovo Archivio Veneto,* n.s. XVIII, pp. 189-203; Marin Sanudo, *I Diarii*, a cura di R. Fulin et al., Venezia, 1879-1902 (ristampa, Bologna, 1969-1970), LVIII, coll. 184-185; Francesco Sanso-

vino, *Venetia città nobilissima et singolare*, Venezia, 1581（con le aggiunte di Giustiniani Martinioni, Venezia, 1663, ristampa, Venezia, 1968）, p. 152.

8）和栗（1998）, p. 164.

9）Venturi（1909）, pp. 211–217. ここで言う「貴族」には，外国人も含まれる。

10）Matteo Casini, *I gesti del principe. La festa politica a Firenze e Venezia in età rinascimentale*, Venezia, 1996, p. 299. ヴェネツィア共和国貴族の成人は25 歳以上であり，この年齢に達すると長衣（トーガ）を着ることが求められた。

11）和栗（1998）, pp. 166–177；同（2001）「モマリア―ルネサンス期ヴェネツィアのスペッターコロと社会」『ルネサンス研究』8, pp. 65–70.

12）Biblioteca del Museo Correr, *Codice Cicogna 1650/XV*, No. 101（Alessandro Pontremoli e patrizia La Rocca, *La danza a Venezia nel Rinascimento*, Vicenza, 1993, p. 154）. 外国の君侯を公賓として迎える場合には，政府が補助金を与えることもあった。Venturi（1909）, pp. 148–149.

13）《菜園家（オルトラーニ）》組の場合は 30 ドゥカート，《永遠（センピテルニ）》組の場合は 50 ドゥカートだった。Sanudo, *I Diarii*, XXVII, col. 493; Venturi（1909）, p. 201. ちなみに，市民階級が担った政府書記官職（国家官僚）の年俸は 50 ～ 200 ドゥカート，貴族のおもな有給官職の年俸は 100 ～ 500 ドゥカートだった（いずれも 16 世紀）。Frederic C. Lane（1973）, *Venice. A Maritime Republic*, Baltimore-London, p. 324.

14）Venturi（1908）; Id.（1909）. 1983 年に両方から抜粋したページが 1 冊の本に復刻された。Venturi（1983）, *Le Compagnie della Calza*（*sec. XV–XVI*）, Venezia. 本稿も，またほかのすべてのコンパニーア・デッラ・カルツァ研究も，基本的な多くのことを Venturi に負っている。

15）20 世紀までのコンパニーア・デッラ・カルツァ研究文献については，和栗（1998）, pp. 177–178, n. 5 を参照。今世紀の研究には，以下のようなものがある。Matteo Casini e Ruggero Rugolo（2001）, ' "La casa del zogo et de desviati": il palazzo degli Este a Venezia, le compagnie della Calza e Biagio Rossetti,' *Venezia Cinquecento*, 21, pp. 71–81; Casini（2011）, 'The «Company of the Hose»: Youth and Courtly Culture in Europe, Italy and Venice,' *Studi veneziani*, n.s., 63, pp. 133–153; Id.（2013）, 'A Compagnia della

Calza in January 1475,' in M. E. Frank and B. De Maria (ed.s), *Reflections on Renaissance Venice. A celebration of Patricia Fortini Brown*, Milano, pp. 55-61; Id. (2013-14), 'Banquets, food and dance. Youth Companies at the table in Renaissance Venice,' *Ludica. Annali di storia e civiltà del gioco*, 19-20, pp. 182-192; Caroline M. Trotier-Gascon (2014), 'Les *Compagnie della Calza*: fête, patriciat et jeunesse a Venise,' *Le Verger* , 06, pp. 1-20.

16) Casini (2011), pp. 147-153. コンパニーア・デッラ・カルツァの政治的・社会的機能については筆者も1998年に論じており，とくに婚礼の祝祭が持つ社会的意義について考察した。和栗（1998），pp. 173-176.

17) カジーニも，次のように述べるにとどまっている。'... they came - according to the opinions of contemporaries and historians - from the wealthyiest and most powerful families of the city'. Casini (2011), p. 150.

18) 各々の組の継続期間については，和栗（1998），p. 164 －図1を参照。

19)「閉鎖（セッラータ）」(Serrata) と呼ばれるこの一連の法的手続きについては，以下を参照。Frederic C. Lane (1971), 'The Enlargement of the Great Council of Venice,' in Rowe, J. G. and Stockdale (ed.s), *W. H., Florilegium Historiale: Essays Presented to Wallace K. Ferguson*, Toronto, pp. 237-274; Chojnacki (1973).

20) ホイナッキによれば，1300年前後の手続きは「第一のセッラータ」にすぎず，15世紀における「第二のセッラータ」および16世紀初期の「第三のセッラータ」を経てヴェネツィア貴族階級の法的定義が最終的に定まった。すなわち，《菜園家（オルトラーニ）》組の活動期間は，「セッラータ」の完成期でもあったのである。Chojnacki (1994), 'Social Identity in Renaissance Venice: The Second Serrara,' *Renaissance Studies*, 8, pp. 341-358; Id. (2000), 'Identity and Ideology in Renaissance Venice: The Third Serrata,' in John Martin and Dennis Romano (ed.s.), *Venice Reconsidered. The History and Civilization of an Italian City-State, 1297-1797*, Baltimore-London, pp. 263-294.

21) 官職売買の詳細については，次の拙稿2篇を参照。和栗(2010)「16世紀ヴェネツィアの門閥家系－サン・マルコ財務官就任者の分析より－」『桃山学院大学人間科学』39，pp. 29-56；同（2014）「16世紀ヴェネツィアにおける官

職売買－サン・マルコ財務官の事例より－」『桃山学院大学人間科学』45, pp. 123-150.

22）16 世紀のヴェネツィアに関する歴史叙述で“ヴェネツィア神話”に言及しないものはないと言っても過言ではない。“ヴェネツィア神話”を中心的なテーマとする研究には，以下が挙げられる。Finlay（1980）, *Politics in Renaissance Venice*, London, Chap. 1; Donald E. Queller（2001）, *The Venetian Patriciate. Reality versus Myth*, Urbana and Chicago, 1986; David Rosand, *Myth of Venice. The Figuration of a State*, Chapel Hill and London; Dorit Raines（2006）, *L'invention du myth aristocratique. L'image de soi du patriciat vénitien au temps de la Serenissime*, 2 vol.s. Venezia.

23）Venturi（1909）, pp. 213-214.

24）Sanudo, *Diarii*（注 7 参照）.

25）Sanudo, *Diarii*, XXXV, coll. 392-393.

26）日記作者サヌードによれば，1527 年の大評議会構成員の数は 2,708 人だった。Sanudo, *Diarii*, XLV, coll. 569-572.

27）ASV（Archivio di Stato di Venezia）, Barbaro, M., *Arbori di patrizi veneti. Miscellanea codici, I: Storia Veneta*, regg. 17-23.

28）備考は，バルバロの家系図群の書き込みのほかに，トレッカーニ社のイタリア人名辞典（*Dizionario Biografico degli Italiani*, ウェブ上で閲覧可能：http://www.treccani.it/enciclopedia）に記載のある人物はその記述をおもな典拠とした。

29）Sanudo, *Diarii*, XXVI, col. 21.

30）Sanudo, *Diarii*, XXVI, coll. 278-279; XXXVII, coll. 470-471.

31）Gino Benzoni e Luca Bortolotti（2002）, 'Domenico Grimani,' *DBI*（*Dizionario Biografico degli Italiani*）, 59（https://www.treccani.it/enciclopedia/domenico-grimani_%28Dizionario-Biografico%29/ 最終アクセス 2021/9/22）.

32）ヴェネツィアの高位官職の官職売買は，選挙時に政府への融資額を示すことでおこなわれた。マルコ・グリマーニは 20,000 ドゥカートという破格の額でこの地位を手に入れた。和栗（2014），p. 139.

33）和栗（2014），p. 140.

34）Giampiero Brunelli（2002）, ‘Marino Grimani.’ *DBI*, 59,（https://www.treccani.it/enciclopedia/marino-grimani_res-540ebc10-87ee-11dc-8e9d-0016357eee51_%28Dizionario-Biografico%29/ 最終アクセス 2021/9/22）.

35）Gullino（2002）, ‘Marco Grimani,’ *DBI*, 59（https://www.treccani.it/enciclopedia/marco-grimani_%28Dizionario-Biografico%29/ 最終アクセス 2021/9/22）.

36）Sanudo, *Diarii*, XXXIII, col. 112; XXXIV, col. 124.

37）和栗（2014）, pp. 141–142. ピエトロの“購入金額”は 10,000 ドゥカートである。

38）Sanudo, *Diarii*, XXXVII, coll. 445–475.

39）Gullino（1983a）, ‘Francesco Contarini,’ *DBI*, 28,（https://www.treccani.it/enciclopedia/francesco-contarini_res-23a7b577-87eb-11dc-8e9d-0016357eee51_%28Dizionario-Biografico%29/ 最終アクセス 2021/9/22）.

40）ASV, Barbaro, *Arbori*, II, 454.

41）《菜園家（オルトラーニ）》組では，ほかに㊲と㊳が兄弟であるが，㊳の生年が不明であるため，両者の年齢の差も不明である。

42）軍監督官はヴェネツィア共和国政府の官職であり，通常は兵站の任務にあたったが，グリッティはほとんど将軍と同じ働きをした。Benzoni（2002）, ‘Andrea Gritti,’ *DBI*, 59,（https://www.treccani.it/enciclopedia/andrea-gritti_%28Dizionario-Biografico%29/ 最終アクセス 2021/9/22）. ヴェネツィア共和国は，イタリア本土の戦争では傭兵隊長を将軍に任命した。和栗（2021）「軍制の展開」『イタリア史２：中世・近世（世界歴史大系）』山川出版社，p. 189.

43）Gullino（1983b）, ‘Pietro Contarini,’ *DBI*, 28,（https://www.treccani.it/enciclopedia/pietro-contarini_res-26ec805a-87eb-11dc-8e9d-0016357eee51_%28Dizionario-Biografico%29/ 最終アクセス 2021/9/22）.

44）Deborah Howard（1975）, *Jacopo Sansovino. Architecture and Patronge in Renaissance Venice*, New Haven and London, pp. 176–177, n.128.

45）Venturi（1909）, pp. 136–141.

46）Sanudo, *Diarii*, XXIX, col. 536.

47）ASV, Barbaro, *Arbori*, V, 7.

48）和栗（2009）「ヴェネツィア共和国の外国人貴族－傭兵隊長の事例より－」『桃山学院大学人間科学』36，pp. 197–222 参照。

49）ASV, Barbaro, *Arbori*, V, 9–15.

50）https://condottieridiventura.it/girolamo-da-martinengo/（最終アクセス 2021/9/22）.

51）ASV, Barbaro, *Arbori*, III, 513. Cf. Gullino（2000）, *Marco Foscari*（*1477–1551*）. *L'attività politica e diplomatica tra Venezia, Roma e Firenze*, Milano.

52）ASV, Barbaro, *Arbori*, IV, 141.

53）ASV, Barbaro, *Arbori*, VI, 123. アンドレア・グリッティとアルヴィーゼ・ピザーニの関係については，Finlay（1978）を参照。

54）Gullino（2002）.

55）ASV, Barbaro, *Arbori*, VI, 129.

56）ASV, Barbaro, *Arbori*, IV, 184; VII, 454.

57）Ennio Concina（1984）, 'Fra Oriente e Occidente: gli Zen, un palazzo e il mito di Trebisonda,' in Manfredo Tafuri（a cura di）, *"Renovatio Urbis." Venezia nell'età di Andrea Gritti*（*1523–1538*）, Roma, pp. 276–279.

58）グリッティの伝記には，次のようなものがある。Ivone Cacciavillani（1995）, *Andrea Gritti. Nella vita di Nicolò Barbarigo*, Venezia; Andrea da Mosto（1960）, *I Dogi di Venezia nella vita pubblica e privata*, Milano, pp. 235–246; Gino Benzoni（2002）, 'Andrea Gritti,' *DBI*, 59（https://www.treccani.it/enciclopedia/andrea-gritti_%28Dizionario-Biografico%29/ 最終アクセス 2021/9/22）.

59）注 17 参照。

60）たとえば，㉒のピエトロ・グリマーニの兄マルカントニオは《永久（エテルニ）》組の会員でサン・マルコ財務官，弟アンドレアは《勇者（ヴァロロージ）》組の会員，マルカントニオの息子オッタヴィアーノは《永遠（センピテルニ）》組の会員でサン・マルコ財務官であった。ASV, Barbaro, *Arbori*, IV, 141; Venturi（1909）, p. 211, p. 214, p. 217. このような例は枚挙に暇がないほどである。

表 1-A：「菜園家組」会員一覧（1）

	姓	名	父	生没年	称号	備　　考
①	Beltrami	Ferier				詳細不明
②	Bembo	Gian Giacomo	Bernardo	? -1542		▪ 枢機卿 Pietro Bembo と父親が従兄弟同士 ▪ 妻は Antonio Cappello PSM の姉妹
③	Benetto	Gabriel	Domenico			Barbaro 家系図で確認できず
④	Bolani	Andrea	Alvise	? -1547		▪ 祖父 Marco は PSM ▪ 姉妹 Lucetta が㊳の妻 = ㊳・㊲と義兄弟
⑤	Boldù	Nicolò	Girolamo	? -1571		▪ 妻はドージェ Andrea Vendramin の曾孫，妻の祖母はキプロス女王の姉妹
⑥	Brexalu*	Gasparo				▪ スペイン人，詳細不明
⑦	Cappello	Bernardo	Lorenzo	? -1544		▪ Santa Maria Mater Domini の系統 ▪ 妻はドージェ Leonardo Loredan の孫
⑧	Cappello	Zaccaria				Barbaro 家系図で確認できず
⑨	Contarini	Agostino	Marc'Antonio	? -1538		特記事項なし
⑩	Contarini	Ambrosio	Andrea	? -1538		▪ 父は 1509 年にフランス軍の捕虜，Cefalonia や Romania の magistrato
⑪	Contarini	Gian Marino	Alvise			Barbaro 家系図で確認できず
⑫	Contarini	Paolo	Zaccaria	1491-1566		▪ 妻はドージェ Andrea Gritti の孫 ▪ 曾祖母が旧パドヴァ領主 Francesco Novello da Carrara の娘 ▪ 兄 Francesco は K, PSM ▪ 息子 Zaccaria は PSM，息子 Marco は Giorgio Corner K の曾孫と結婚 ▪ ㊴と義兄弟（兄弟か姉妹が Marino Trevisan と結婚） ▪ ⑬は双子の弟
⑬	Contarini	Pietro	Zaccaria	1491- ?		▪ ⑫の弟 ▪ 父とともにフランスの捕虜（1509-1513） ▪ Baffo 司教
⑭	Cosaza*	Giovanni				▪ スペイン人，詳細不明
⑮	Corner	Marco	Pietro	? -1533		▪ 伯父 Francesco の妻はネグロポンテの Sommaripa 家 ▪ 祖父 Marco は 1464 年に対ハンガリー戦で Commissario として任務中に疫病死 ▪ 本人は 1533 年に Sopracomito di Galea として任務中に海賊につかまり死亡
⑯	Dolfin	Dolfin	Pietro	? -1551		▪ 父は K，母は Andrea Giustinian PSM の姉妹 ▪ 祖母はドージェ Nicolo Tron の孫

	姓	名	父	生没年	称号	備　　考
⑰	Giustinian	Bernardo	Alvise	? -1528		▪妻はOmobon Gritti di Battistaの娘 ▪㉓と義兄弟（妻の兄弟）
⑱	Giustinian	Leonardo	Bernardo			Barbaro家系図で確認できず
⑲	Giustinian	Marino	Sebastiano	? -1542	K	▪父SebastianoはPSM，K ▪皇帝カール5世への大使（その際に騎士叙任か?）
⑳	Grimani	Antonio	Vincenzo	? -1527		▪㉑の従兄弟，祖父と㉒の父が従兄弟 ▪ドージェAntonio Grimaniの孫，枢機卿・PA Domenico Grimaniの甥，枢機卿・PA Marino GrimaniおよびPSM Vettor GrimaniおよびPA Giovanni Grimaniの従兄弟 ▪妻はElisabetta Pisani di Alvise PSM=Andrea Grittiのビジネス&政治パートナーの娘，Andrea Grittiの孫Benedettaの夫Giovanni PSMおよびFrancesco Pisani枢機卿およびGiovanni Corner di Giorgio（=女王の甥）の妻Adriana Pisaniの姉妹
㉑	Grimani	Marco	Girolamo	1494-1544	PSM PA	▪ドージェAntonio Grimaniの孫，枢機卿・PA Domenico Grimaniの甥，枢機卿・PA Marino Grimaniの弟，PSM Vettor GrimaniおよびPA Giovanni Grimaniの兄，自身も1529-1533にPA eletto（兄Marinoの代理?）。 ▪1522年にPSM（買官），1529-1533の間PA。 ▪妻はBianca Foscari di Francesco PSM・Kの娘 ▪娘Elenaの夫はPietro Foscari（SMV）di Marco（SMV）=Andrea Grittiの従弟の息子 ▪⑳の従兄弟，祖父と㉒の父が従兄弟
㉒	Grimani	Pietro	Francesco	? -1538	PSM	▪父と⑳・㉑の祖父が従兄弟 ▪1538年にPSM（買官）。2人の兄もPSM（Vincenzo 1529～，Marc'Antoniio 1564～）。甥OttavianoもPSM（1571～）。 ▪初婚の妻はMaria Foscari di Marco（Andrea Grittiの従弟），兄Vincenzoの妻はGirolamo Giustinian PSMの娘。
㉓	Gritti	Francesco	Omobon	? -1533		▪父とAndrea Grittiの父が従兄弟 ▪⑰と義兄弟（姉妹の夫）

表1-B：「菜園家組」会員一覧（2）

	姓	名	父	生没年	称号	備　　考
㉔	Lippomano	Zaccaria	Girolamo	? -1541		▪母はドージェ Andrea Vendramin の 孫（Paola Vendramin di Bartolomeo di Andrea） ▪父は銀行家だったが破産して1503年からローマに移り，教皇ユリウス2世およびレオ10世と関係を深め，Vzとの間を取り持つ。 ▪兄弟 Pietro はベルガモ司教。
㉕	Manfron*	Giulio				詳細不明
㉖	da Martinengo*	Antonio	Bernardino	1493-1528		▪ブレシャ貴族，傭兵隊長 ▪祖父 Antonio K が軍功により Vz 貴族位を授与される（1448年）。 ▪1512年，ブレシャ奪回戦で Vz に協力（Andrea Gritti に市門を開けようとする）。このときは失敗し，Gritti とともにフランス軍の捕虜となる。 ▪1516年，ブレシャやヴェローナの奪回に貢献。
㉗	di Martini*	Alvise	Pietro			詳細不明
㉘	Michiel	Ludovico	Pietro	? -1538		▪母方の祖父は Antonio Donà PSM
㉙	Mocenigo	Gian Francesco	Leonardo	? - ?		▪祖父 Tommaso は PSM ▪母 は Francesco Pisani di Ermolao の娘 =Alvise Pisani PSM の従姉妹 ▪曾祖父 Nicolo も PSM，ドージェ Pietro および Giovanni の兄弟 ▪高祖父 Leonardo も PSM，ドージェ Tommaso の兄弟 ▪曾祖母（曾祖父 Nicolo の妻）はキプロス女王のおば（= 祖父 Tommaso はキプロス女王の従兄弟）
㉚	Nani	Battista	Paolo	? -1554		特記事項なし
㉛	Navagero	Luca	Bernardo	? -1547		特記事項なし
㉜	Pisani	Giovanni	Vettor			▪妻は Marco Gritti（ドージェの従兄弟）の娘 ▪Vicenza のポデスタ ▪妹 の 夫 は Benedetto Grimani di Marino（S. Luca の ramo）= ドージェ Antonio Grimani の従兄弟の息子，Girolamo Grimani PSM&K，Trionfanti の兄弟
㉝	Pisani	Marino	Alessandro	? - ?		▪妻（1537結婚）は Marco Grimani PSM, SMV の姉妹
㉞	Querini	Girolamo	Francesco	? -1547		▪枢機卿 Pietro Bembo の友人
㉟	da Sanseverino*	Pier Antonio		1500-1559		▪Bisignano 領主

	姓	名	父	生没年	称号	備　　考
㊱	Soranzo	Pietro	Giovanni			▪ 妻は Giorgio Corner K の娘 = 女王の姪 ▪ 大叔父 Benedetto はキプロス島ニコシア大司教 ▪ 叔父 Alvise の妻は Paolo Cappello K, PSM と Regina Corner（女王の姉妹）の娘 = 女王の姪
㊲	Tiepolo	Francesco	Girolamo	1510-1559		▪ ㊳と兄弟
㊳	Tiepolo	Lorenzo	Girolamo	? -1558		▪ ㊲と兄弟 ▪ 妻は④の姉妹 = ④と義兄弟
㊴	Trevisan	Marino	Merchiorre	? -1518		▪ ⑫・⑬と義兄弟（妻が Zaccaria Contarini K の娘） ▪ 父 Merchiorre は陸海両面で活躍した軍人
㊵	Venier	Marc'Antonio	Pellegrino	? -1550	K	▪ 母は海軍大将 PSM Vincenzo Cappello の姉妹
㊶	Vitturi	Giacomo	Alvise	? -1559		▪ 母は Merchiorre Trevisan di Paolo の娘 = ㊴の姉妹 = 本人が㊴の甥
㊷	Zane	Antonio	Girolamo	? -1553		特記事項なし
㊸	Zen	Carlo	Pietro	? -1526		▪ 祖母は Violante Crispo= 父はキプロス女王の従兄弟 ▪ 父はコンスタンティノープルの Bailo（1523 年），Andrea Gritti の庶子 Alvise と親しい
㊹	Zorzi	Domenico	Alvise	? -1558		特記事項なし

〈略号・記号一覧〉
K= 騎士，PA= アクイレイア総大司教，PSM= サン・マルコ財務官，Vz= ヴェネツィア，*= 外国人または非貴族
〈おもな典拠〉
会員名（父親の名を含む）：Venturi（1909），pp.213-214；家系：ASV, Barbaro, *Arbori, passim.*

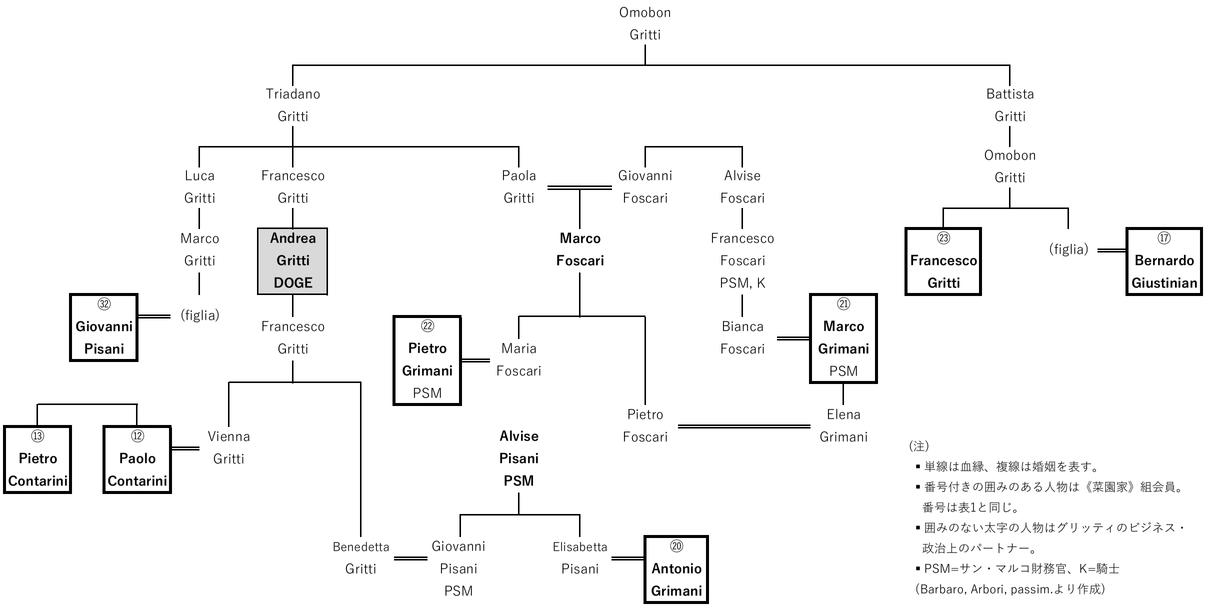

図１：アンドレア・グリッティ周辺の血縁・婚姻関係

(注)
- 単線は血縁、複線は婚姻を表す。
- 番号付きの囲みのある人物は《菜園家》組会員。番号は表1と同じ。
- 囲みのない太字の人物はグリッティのビジネス・政治上のパートナー。
- PSM=サン・マルコ財務官、K=騎士

(Barbaro, Arbori, passim.より作成)

16世紀ヴェネツィア寡頭支配層の多面的ネットワーク

Multiple Networks of the Venetian Oligarchy in the Early Sixteenth Century

― A Prosopographic Analysis of a *Compagnia della Calza* ―

WAGURI Juri

As in every society, patricians of the Venetian Republic were combined with one another by various personal ties. Such relationships were especially significant for the top-ranking patricians in the early sixteenth century, when the tendency for the oligarchy was so intense in Venice. They weaved out multidimensional networks, through which the power went concentrated in their hands. In addition to kinship and marriage bonds, they had a great diversity of social connections through formal and informal associations. One of these jointing points of Venetian nobles was the *Compagnia della Calza*.

The *Compagnie* (*pl.*) *della Calza* were "youth societies" and festive associations almost exclusively for nobles. They organized pageants and banquets on such occasions as carnival, the wedding of members, and welcoming foreign princes. According to the contemporaries, there existed 30–40 *Compagnie della Calza* between the middle fifteenth and the middle sixteenth centuries. For the last half-century, historians paid more and more attention to these groups, mainly with interests in festivities and theatrical plays. Many of them have pointed out the importance of the *Compagnie della Calza* in the social life of Renaissance Venice and referred to the high status of their members. However, no prosopographic investigation into any specific *Compagnia* has been conducted so far.

In this paper, I analyzed 44 members of the *Compagnia degli Ortolani*

(Company of the Gardeners). We can collect pieces of information about its membership and activities from the diaries of Marin Sanudo, a contemporary patrician (from this and other sources, Lionello Venturi drew up member lists of 12 *Compagnie*, including that of *Ortolani*, in 1909, but with omissions and duplications). In the first place, I consulted the *Genealogie Barbaro* in the State Archive of Venice to identify every member of the *Ortolani*. These genealogies give us personal data on thousands of patricians of Venice. Then I searched for more detailed information about the *Ortolani* members, mainly in the *Dizionario Biografico degli Italiani* published by Treccani Institution.

This analysis revealed individual relationships among the *Ortolani* members and confirmed that many of them were scions of the most prestigious and wealthiest families. Two members married the granddaughters of two Doges in office (Leonardo Loredan and Andrea Gritti) and another two were grandsons of another Doge (Antonio Grimani). Two members could "buy" the status of the *Procuratore di San Marco*, the highest position in the Venetian government only second to Doge, though still being inexperienced young men, one for 20,000 and the other for 10,000 ducats.

A peculiar thing about the *Ortolani* members is the fact that many of them had personal ties with Andrea Gritti. Some had blood or matrimonial connection with him or with his business/political partners. During the War of the League of Cambrai, two members were co-prisoners of Gritti in France. After their release, they fought in collaboration with him and accomplished the reconquest of the mainland territories. Considering that the *Ortolani* were active in the "post-Agnadello" period, they might have shared a special sense of belonging to the elite group.

In the course of this investigation, I found a number of other *Compagnie* members among close relatives of the *Ortolani* members. For further elucidation of multiple and intricate personal networks of

Venetian nobles, we need to extend our research to other *Compagnie della Calza* and other associations.